



# 沖縄・八重山文化研究会会報

第 23 5 号

発行 沖縄・八重山文化研究会  
 事務局 沖縄県立芸術大学付属  
 研究所 波照間永吉研究室  
 那覇市首里金城町三一六  
 〒981-8825 〇四三

## 第二三五回沖縄・八重山文化研究会

は、二〇一三年三月一七日、県立芸大付属  
 研究所内で開かれ、佐々木和子氏（県立芸  
 術大学大学院芸術文化学専攻後期博士課  
 程）が「八重山歌謡に歌われたアコウ」と  
 題して発表した。

佐々木氏は横浜生まれ。一九九五年から  
 沖縄に住み、二〇〇九年、沖縄国際大学大  
 学院地域文化研究科南島文化専攻卒業後、  
 二〇一一年から県立芸術大学大学院 芸術  
 文化学専攻芸術文化学専攻所属で波照間  
 永吉教授の下で、琉球の歌謡の研究をして  
 いる。現在は主に琉球の島々に暮らしてき  
 た人々が、島の植物や動物についてどのよ  
 うに歌謡の中に伝えてきたかと云う点に関  
 心を持って調査研究している。

氏は第二〇七回（二〇〇九年十二月）の  
 例会でも「八重山古歌謡の表現の研究」と  
 題して発表しており、稲が種子アヨーを中  
 心にその構造を考察した。

今回は八重山古謡で「植物」がどのよう  
 にうたわれているかを考察し、八重山歌謡  
 の文学表現の特徴の一つを描き出した。

## 八重山歌謡に歌われたアコウ

—植物と歌謡の関係を考える—

佐々木 和子

八重山歌謡の星、雨、風、動物、植物な  
 ど自然物の表現が示す、観察力や情感の優  
 れていることは、これまでにも指摘されて  
 いる（注1）。本発表では、自然物を題材  
 にしている歌謡の中から、特に植物が登場  
 する歌謡を中心に取り上げた。八重山歌謡  
 にどのような植物が登場し、どのような姿  
 が語られてきたか、植物に関わる表現を通  
 して、暮らしや、樹木観、文学表現として  
 歌謡の特徴について考えたい。先行研究に  
 は、山里純一氏が「八重山歌謡に見る動  
 物」「八重山歌謡に見る植物」（注2）にお  
 いて、八重山歌謡に登場する動植物につい  
 て概観されている（注3）。

本発表の歌謡のテキストは、『南島歌謡  
 大成 IV 八重山篇』の中の歌謡を主とし  
 ている。対象とした歌謡の中に、現在のと  
 ころ、六八種の植物名を筆者は確認してい

<p>る。発表では、その中からアコウが謡われている歌謡を取り上げた。</p> <p>テキストには、アコウが登場する歌謡は八篇ある。それらは、表現の内容の類似によって、①「山樫のあゆう」（黒島）歌謡群、②「こいなーゆんた」（石垣島大川村）歌謡群、③「ばしいゆんた」（石垣島川平村）歌謡群の三つに分類することができ。「ばしいゆんた」と内容が類似した歌謡は五篇ある。「ばしぬ鳥ゆんた」（石垣村）、「鷺ゆんた」（大川村）、「鷺ゆんた」（白保村）、「ばしぬ鳥ゆんた」（竹富島）、「いらさにーさじらば」（大浜村）は、物語の展開は同じなので類歌とし、ここでは「ばしいゆんた」（石垣島川平村）を代表歌謡とした。</p> <p>①から③の歌謡に登場するアコウは、それぞれ異なる情景の表現となって謡われている。</p> <p>①「山樫のあゆう」（黒島）では、アコウが石の上に根を下ろす姿を謡う。そのアコウの姿に、村人達自身（吾等）の姿を重ね見て、そうありたいと祈る呪的な文言で歌は結ばれている。この歌謡では、アコウの姿は人の願望を示す比喩的表現となっている。</p> <p>②「こいなーゆんた」（石垣島大川村）では、アコウは、「こいな」が実を食</p>	<p>べに来る木であり、その鳥を人が捕獲にやってくる木として謡われている。実をつけるアコウが、物語の展開に欠かせない鳥と人を結ぶ役割を果たしている。</p> <p>③「ばしいゆんた」（石垣島川平村）では、アコウは鷺が巢を作り、子育てをする木であり、正月の日の出に若鷺がアコウの木から巣立っていく情景が謡われている。アコウは物語の舞台である。</p>	<p>以上が、八重山歌謡に登場するアコウについての表現の概要である。ここでわかることの一つは、アコウの樹木としての生態の特徴や、アコウと鳥と人の関係等、よく観察されている点が挙げられる。その観察力は言い換えれば、人々がアコウに向ける関心の深さでもある。その関心を基に、歌謡群それぞれに特徴的な内容を謡っている。「山樫のあゆう」の樹木と人を重ね見る比喩表現の成立は、人と植物を、生きる物同士として対比する観念を感じさせる。また、「こいなーゆんた」では、アコウとその木の実を食べに来る鳥は、この歌謡が持つモチーフの普遍性に対して、八重山の風土色を加えている。「ばしぬ鳥ゆんた」における鷺や太陽という普遍的な信仰を背景にした自然物とアコウとの結びつきは、</p>
<p>八重山における樹木の信仰についての検討を示唆している。この様に、歌謡の中のアコウは多角的に表現されている。</p> <p>こうした八重山歌謡が見せる植物の表現には、その背後にある暮らしや、樹木観等の多様さが含まれている。今後、八重山歌謡の中に登場する植物の表現について検討分析を重ね、人々が歌謡に伝えた自然観や樹木観等の特徴を明らかにしたい。歌謡の中の植物に関連する表現は、島々の民俗・信仰・歴史・生活等に育まれた文学表現の世界の特徴の一つを形成すると考えている。</p>	<p>注1 高教組教育資料センター『新篇 沖縄の文学』編集委員会 『新篇 沖縄の文学 増補改訂版』沖縄時事 出版 二〇〇八 五二頁</p> <p>注2 山里純一 『日本東洋文化論集14』「八重山歌謡に見る動物」琉大法文学部紀要 二〇〇八年</p> <p>同 『日本東洋文化論集6』「八重山歌謡に見る植物」琉大法文学部紀要 二〇〇〇年</p> <p>注3 「八重山歌謡に見る植物」で、山里純一氏が植物抽出の対象とされた歌謡のテキストは、『八重山民謡誌』および『八重山古謡』を基本にして、それに収録されていないものに限って『南島歌謡大成IV八重山篇』やその他の資料から引用（山里純一 二〇〇〇年 二〇八頁）としている。それらのテキストから、五七種の植物を抽出されている。</p>	<p>注1 高教組教育資料センター『新篇 沖縄の文学』編集委員会 『新篇 沖縄の文学 増補改訂版』沖縄時事 出版 二〇〇八 五二頁</p> <p>注2 山里純一 『日本東洋文化論集14』「八重山歌謡に見る動物」琉大法文学部紀要 二〇〇八年</p> <p>同 『日本東洋文化論集6』「八重山歌謡に見る植物」琉大法文学部紀要 二〇〇〇年</p> <p>注3 「八重山歌謡に見る植物」で、山里純一氏が植物抽出の対象とされた歌謡のテキストは、『八重山民謡誌』および『八重山古謡』を基本にして、それに収録されていないものに限って『南島歌謡大成IV八重山篇』やその他の資料から引用（山里純一 二〇〇〇年 二〇八頁）としている。それらのテキストから、五七種の植物を抽出されている。</p>

文化短信

西表豊原が入植六〇周年  
地域挙げて節目祝う

西表豊原地区入植六〇周年記念式典・祝賀会(同実行委員会主催)が六月八日午後、豊原開拓の里大ホールで開かれた。豊原集落は一九五三年に琉球政府の計画移民で本島大宜味村や久米島、宮古島、竹富町内の各島々から四七世帯・一九三人の開拓団が入植した。式典では、開拓一世の二二人に感謝状を贈呈。「豊原音頭」や旗頭が披露されるなど、地域を挙げて入植六〇周年を盛大に祝った。

琉球弧芸能祭  
琉舞と八重山舞踊共演

「三線の糸で結ぶ島々の琉球弧芸能祭」  
組踊、琉球舞踊と八重山舞踊の花舞台」

(同実行委員会主催)が四月二十七日、市民会館大ホールで開かれた。同芸能祭は互いの芸の垣根を越えて文化交流を行い、発展させようと企画されたもの。

男性舞踊家「飛輪の会」(眞境名正憲会長)の会員一九をはじめ、八重山舞踊勤王流祥吉千代乃会宮城千代舞踊研究所の師匠ら八人の計二十七人が出演し、流派を越えて格調高い演舞を披露した。

また、同研究所や野村流古典音楽保存会琉球箏曲保存会の会員一六人が地謡を務め、芸能祭を盛り上げた。

伝統の巻踊りに二〇〇人  
波照間の豊年祭で恒例行事

波照間公民館(新川登館長)の巻踊りが五月二五日、ムシャーマ公園で行われ、子どもからお年寄りまで約二〇〇人が参加、一年間の豊作を島を挙げて祈った。

巻踊りは豊年祭の行事のひとつで、一年間の豊作に感謝する「プーリン」とこれから一年間の豊作を祈願する「アミジュワ」の間に行うもの。豪快なドラの音でスタートし、集まった人たちはサトウキビの葉を頭に巻き、子どもを中心に大きな二重の輪になると、ジラバに合わせて手拍子を打ち、「ヘイヤー、ヘイヤー」の掛け声とともに手をつないで踊った。

「御絵図」市文化財に指定  
人間国宝の故・鎌倉氏が寄贈

琉球王府などに献納する貢納布を織るための図案「御絵図(みえず)」(石垣市立八重山博物館収蔵)が石垣市の文化財(工芸の部)に指定され、三月二十七日、市教育委員会指定書交付式が行われた。これで市指定文化財は七八件となった。

「御絵図」は、国の重要無形文化財「型絵染」保持者(人間国宝)で石垣市名誉市民の故・鎌倉芳太郎氏から一九七八年に八重山博物館に寄贈された。同資料は鎌倉氏が正和から昭和にかけて美術工芸の調査で沖縄を訪れた際に収集したもので、八重山上布絵図や伊江王子御免銀御絵図など四六点からなる。

「御絵図」は見本として王府に献納するために、仕上がった織物と照らし合わせて模様などを検査する役目も担っていたとされ、八重山のみならず、沖縄の王府時代の御用布を知るうえで貴重な資料である。



新刊紹介

首里王府の正史に記された八重山  
石垣市教育委員会市史編集課編  
『石垣市史叢書19 球陽』  
八重山関係記事集(上巻)』

石垣市教育委員会はこれまで市史叢書として、『慶来慶田城由来記：富川親方八重山島諸縮帳』『与世山親方八重山島規模帳』『参遣状抜書』など、古文書を翻刻して現代語訳を付すという形で一八冊を刊行してきた。古文書が比較的良好に保存されている八重山ならではのシリーズであるが、一方で『球陽』の八重山関係記事の刊行もまた待ち望まれていたのである。

本書は、従来の市史叢書とは異なり、すでに活字化されている資料(『球陽 読み下し編』昭和四九年刊)から、八重山関係記事を抽出し、さらにわかりやすく現代語訳を付している。最初に八重山の間切と村、蔵元の機構と村、二枚の図を掲載して本書を読んでもいくの基本的な情報がまず示され、解題(得能壽美氏)で『球陽』全体の内容や八重山関係記事の内容についてわかりやすく記されており、これまた本書を読むためのガイドとしてふさわしい。

『球陽』は一七四三年〜四五年に琉球王国の正史として編纂された史書である。本巻正巻二二巻・同付巻四巻・外巻正巻三巻・同付巻一巻から成る(外巻は『遺老説伝』とも呼ばれる)。久米村の鄭秉哲などによって編纂され、一七四五年には一応の完成をみるが、その後も一八七六年まで追記が行われたとされる。収録記事は、国王から庶民まで、首里から宮古・八重山まで、琉球の開闢から廃藩直前までと多岐に亘る。そのため、各市町村史も『球陽』から地元の記事を抽出して載せることが多い。『平良市史』も『球陽』から宮古関係記事一一五項目を抜き出しているが、これらは基本的には読み下し編の記事をそのまま掲載したものである。本書のように、さらに現代語訳を付して一冊とするのは時代のニーズに対応したやり方といえよう。さて、本書によれば『球陽』にみえる八重山関係記事は二三三項目もあるという。これは『球陽』全体の記事数(正巻・付巻あわせて二五八八項)からみると、宮古が一五項目であることを考えると、結構多いのではないだろうか。これからのようなことが読み解けるのか。なかには、いわゆる歴史の表舞台の事件ではなく、人々の生活や社会が垣間見える記事も多い。本書は上巻として一二三項目を収録し、他は下巻に収録するという。下巻の刊行が

楽しみであり、上下あわせて、王府の正史に八重山関係のどのような記事が収録されているのかを概観する上でも便利となろうし、今後の八重山研究史にも大いに活用されるだろう。

(B5版 一〇一頁 頒価八〇〇円)  
発行 石垣市教育委員会

なお石垣市史では「石垣市史研究資料」として、

石垣市大浜地区に語り継がれる民話を集

めた「大浜の民話1」「同2」も刊行している。昭和五〇年〜五三年に沖縄国際大学、立命館大学、大谷女子大学及び八重山民話研究会の合同調査により採録された原話を中心に、山里純一市史編集委員の採集したものを加えたもので、各々二八編、一九編を収録している。いずれも方言表記による原話、共通語訳、解説付き。

次回のお知らせ

★九月十五日(第三日曜日)  
講師 大濱郁子氏(予定)  
詳細はおってお知らせします。

